

## 保育、安全、コミュニケーションの基礎

掛札逸美（心理学博士）

保育の安全研究・教育センター

★保育の安全研究・教育センターのサイト：「保育の安全」で検索 <https://daycaresafety.org/>

★YouTube 等：上のサイトのトップページにリンク

### ● 仕事の基本は？

1) しなければならない行動を、その通りにできる

世の中の、ほぼすべての仕事はこれで成り立っている

・わからないことがあったら、こうする

・問題が起きたら、こうする …にも、すべてマニュアルがある

2) 自分の知識、スキル、裁量で進め、要求された結果を出す

仕事としては珍しい。結果を出さなければ、働き続けることはできない

・保育は、保育者の個性の上に成り立つので、この部分が大きい

・未就学児に「結果」は見えないため、保育者の知識やスキルは問われにくい

#### ▶ 1と2を混同しない

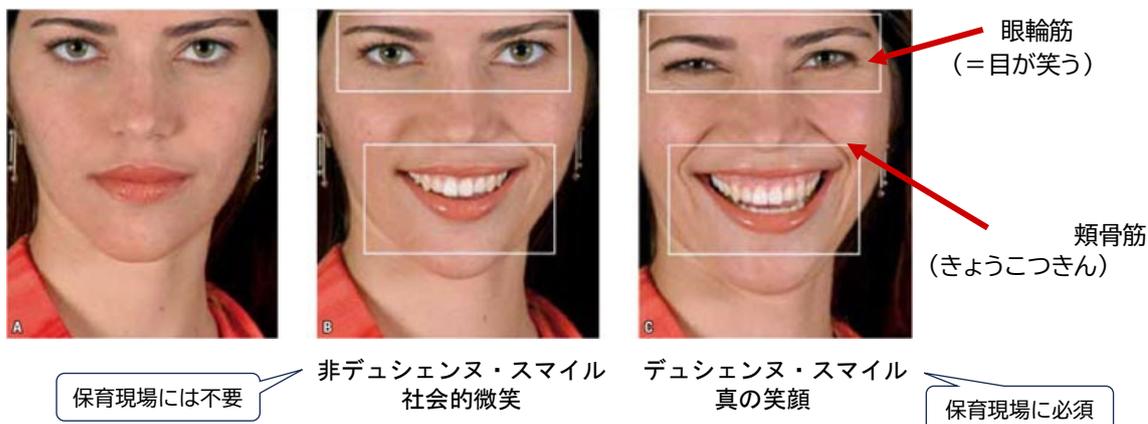
保育にも1)はたくさんある。 X「できない」「やらない」「自分のやり方でいい」

例：時間を守る（出勤、作業や書類の期限など）、担当作業、言葉づかい、服装、安全行動など

2)も、基本的なスキルを十分に身につけてから、「自分の方法」につなげていく

例：乳児の正しい抱き方を、いろいろな子どもについて習い、習得する。最初から「自分はこう抱っこすればいい」と考えたら、危険なだけ

### ● 相互の信頼関係をつくる、かかわりの基礎：表情＝真の笑顔（デュシェンヌ・スマイル\*）



- ・デュシェンヌ・スマイルは、感情や記憶を司る大脳辺縁系（生き物の古い脳）とつながっている自発的／無意識なもの（＝楽しい／うれしいから笑う★）。一方、非デュシェンヌ・スマイルは運動野が司り、意識的に「する」もの。
- ・デュシェンヌ・スマイルは強力な「社会的報酬 social reward」\*\*。デュシェンヌ・スマイルは「ポジティブな感情が今、自発的に起きている」という現れなので、それを見た相手も肯定的に感じ、「自分も楽しい／うれしい」と感じる（報酬）。
- ・非デュシェンヌ・スマイルは感情に由来せず、価値は文化によって異なる（対人動作が文化によって異なるのと同様）。報酬としての価値は低く、「薄笑い」「つくり笑い」と見られることも。
- ・乳児は、おとなからデュシェンヌ・スマイルを引き出そうとし、自分も笑う（生後すぐの生物学的微笑から始まる）。

おじぎ、握手、ハグ…

例：おとながくりかえす行動（なんでも！）に赤ちゃんが（まるでひきつけのように強く）笑い続ける → おとなも笑う → 双方に対する強力な報酬 → つながりの強化+同様の行動の強化学習

保育者の必須スキル

★頬骨筋（きょうこつぎん）を意識的に動かして、デュシェンヌ・スマイルを「作る」ことはできる。デュシェンヌ・スマイルの筋肉の動きは大脳辺縁系とつながり、シグナルは双方向なので、デュシェンヌ・スマイルを「する」とその人の気分（ムード）が良くなることは長年の実験からも明らか（「楽しいから笑う」＝「笑うから楽しい」。「笑うと気持ちが明るくなる」）。逆に、非デュシェンヌ・スマイルを意識的にくりかえすことは感情労働による疲弊につながる場合もある。特に、本当の感情を抑えて非デュシェンヌ・スマイルを続ける場合。

\*：19世紀の神経学者ギヨーム・デュシェンヌが研究したことから。デュシェンヌ型筋ジストロフィーも同じ由来。同世代のチャールズ・ダーウィンも、表情は生物の進化によるものと仮説を立てていた。

\*\*：P Ekman et al. (1990), DM Shore & EA Heerey (2011) 等の論文（左で検索すれば当該論文が出ます）。

保育の仕事に必須

### ● あたたかく明るい、声のトーン（真の笑顔とセット）

能面で、あたたかく明るい声を出してみてください

- ・明るいトーンの声は、デュシェンヌ・スマイルの状態でなければ出せない。
- ・赤ちゃん言葉は、赤ちゃんの脳に入りやすい言葉（「おとなの話し方で話してはいけない」とは言っていません。「赤ちゃん言葉のほうがいい」だけ）。【『子ども育ての本』36ページ(特に保護者向け)。93～94ページ】
- ・怖い声のトーンは眠っている0歳児の脳にもストレス反応を起こす【98～99ページ】。「意味はわからないから大丈夫」ではない。ストレスはホルモン等を通じて成長発達に影響。

保育の仕事に必須

怒鳴ったら、おとなも聞いていない、聞けない。【定番YouTubeの16】

### ● 子どもに体と顔を向けて、子どもの目の高さで、視線を合わせてやりとりをする

- ・生後5か月児も「自分に向かってやりとりしているおとな」を理解している【『子ども育ての本』36ページ(保護者向け)。147ページ】。（「生後5か月までわからないから、それまででなくていい」という意味ではない。この種の実験が今の時点では生後5か月以降ぐらいでないとできないだけ。）

● 園内でコミュニケーションが成り立たなかったら、安全も保育の質も確保できない  
= 園が危機におちいるリスクを上げる

★ 鉄道、飛行機、工事現場、工場…、あらゆる場所でコミュニケーションが安全の鍵。センサーや機械がすぐれていても、最後は人間の判断とコミュニケーション

★ 未就学児施設の場合、環境面の安全は基本的に確保されているはず。残るのは、ほぼすべて人間の要因（ミス、ヒューマン・エラーと呼ばれるもの）

★ 人間の脳はもともと「つい」「うっかり」+ 隙あらば、「ぼんやり」し始める

【『子ども育ての本』185ページ～】

- ・ 忘れた人は、忘れていたのだから、忘れたことに気づかない
  - ・ 間違えた人は、間違えたのだから、間違ったことに気づかない
- 他人が気づいて(責めずに)伝える  
+他人が気づけるシステムづくり(※)

※「保育の安全」サイト→「安全」→2-6の項「できごと別の解説」の9に参考例

★ いわゆる「不適切な保育」を放置することになり、子どもに害が及び、園が壊れる

● 安全上のコミュニケーションは、「みんなで仲良く」ではない！

★ **まず片道！** = 「おかしい」「危ない」「わからない」と思ったら言う／尋ねる  
上下や年齢は関係ない。仕事なのだから、言う／言われるのが義務

★ **情報伝達は一往復半** ← 人間は皆、必ず、言い間違い、聞き間違いをするから  
← 未就学児施設の場合、口頭の情報伝達が主になるから

「保育の安全」サイト→「安全」2-4に「一往復半」、2-3に「指差し声出し確認」

● 「指摘される」「間違いをただされる」も仕事

「保育の安全」サイト→YouTubeの39～

「園長に怒られて…。嫌われていると思う」「先輩に叱られて、話すのが怖い」  
「パワハラだ！」「私は頑張っているのに！」

★ 「なにかを言われたから傷つく」と  
「傷つくことを言われた」は、違います

役に立つ「なにか」は受けとめる。でも、感情には受け入れない

★ アドバイス、指導、叱る：具体的な言動、言葉に対するもの

★ ハラスメント：「あなたはいつも、なんでもダメ」や、容姿、性別等に対する発言

★ 言う側も、「傷つけてやろう」と

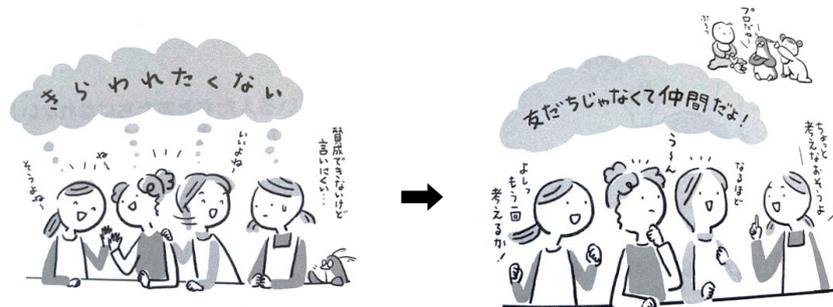
「そういうことを言わないでください」「それは差別／言葉の暴力です」

「伝えたい」「教えてあげたい」「育ててほしい」を区別していますか？

「個人的、感情的にとらないで。でも、私の言い方が悪かったら、そう言って」

- ★ 何度も同じアドバイスを繰り返していれば、いらだつのは当然。ですが…
  - ・ 保育は「一度聞いたら、わかってできる仕事」ではなく、「できるようになっていく仕事」
  - ・ 怒った声で伝えるのは、相手にも伝わらず、その後のコミュニケーションも悪化させる

「保育の安全」サイト→YouTube の28、6、7、16、17



『保育者のための 心の仕組みを知る本』

## ●安全の基本：子どもの命を守る、自分の心と仕事を守る

「保育の安全」サイト→YouTube の各項目。「安全」の各項目

- ★ ドア、扉の鍵は開けたら閉める。閉まっていることを確認する。後ろ手に閉めない
- ★ 睡眠（午睡）は寝かしつけから必ず仰向け（0歳、1歳児クラス）
  - 睡眠チェックも絶対に行く
  - 以上児でも、新入園児は保育者の近くに寝かせて、睡眠チェックをする
  - 無理に寝かしつけることはしない（うつぶせトントンにつながる。入眠不安の原因にも）
- ★ 食事で絶対にしてはいけないこと：無理に食べさせる、すべて食べるよう強要する
  - 乳食を先に進めようとする
  - 誤嚥窒息のリスクを上げる
  - 食事に対する嫌悪感を植えつける
  - 保育者に対するアタッチメントを壊す
- ★ 取り残し、置き去りを予防する（特に、交通事故や熱中症のリスクがある時）
  - ・ 「今いるべき子どもの数」を間違えない！
    - 人数確認は、「今いるはずの子どもの数＝今いる子どもの数」
  - ・ いつ、どこで、どのように人数確認をするかをクラスの中ではっきりさせる
    - 外遊びから帰ってきて30分後に人数確認をしたのでは…
    - 保育者が子ども集団のどの位置にいて、どう動くかにもかかわる
  - ・ 「きっと、いるはず」と思わない
  - ・ 他の保育者から人数の変化を伝えられたら、必ず復唱して一往復半。自分が伝えた時は復唱を要求して、一往復半